

中央区男女共同参画ニュース



Bouquet

ブーケ

特集

たのしい生活 女性と健康

No.54
2007.12

CONTENTS

特集 たのしい生活 女性と健康

気軽に健康相談 るかなび 2P
乳がん手術後の女性をサポート YWCAフィットネスワオ
体調不良は自分と向き合うチャンス 竹森茂子さん

女性の健康と痛みの関係

青木クリニック院長 青木正美さん 5P

輝くひとにインタビュー in 中央区 稲邑恭子さん 6P

Topics 「感謝の気持ちをかたちにした〜ゆいごんで〜」 7P

企業レポート (有)ライトデザイン 7P

中央区ニュース 8P



太極拳教室で健康づくり(シニアセンター)

たのしい生活

女性と健康

いま、日本は空前の健康ブームです。老若男女を問わず、多くの人が「健康」に強い関心を持つていると思われれます。しかし、ひと口に「健康」といっても、性別や年齢によりかかりやすい病気などが異なります。今号では、成人女性が陥りやすい健康上の問題やその予防方法などを中心に特集し、女性が充実した人生を過ごすために不可欠な身体と心の健康について考えます。

るかなび



YWCAフィットネスワオ

女性がかかりやすい病気

女性に多い病気にはどのようなものがあるのでしょうか。

まず挙げられるのが、子宮、卵巣、乳房などの病気です。女性器にできるがんや筋腫、子宮内膜症や卵巣等の機能障害、妊娠・出産にともなう合併症などです。たとえば乳がんの場合、患者数はここ10年ほどの間に減少していますが、いまだ死亡する女性も少なくなく、二〇〇六年では一、一七七人（厚生労働省「人口動態統計」）となっています。その約半数が50歳から60歳の世代ですが、50歳未満の死亡者も15パーセント程度見られます。

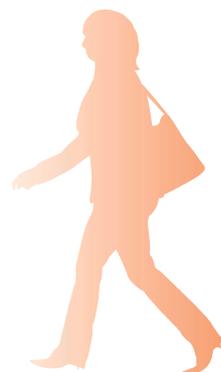
関節リウマチ、骨粗しょう症、外反母趾など、筋骨格系の疾患も女性に多く見られます。これらは、男性に比べて女性の骨や筋肉が弱いことにもよりますが、出産や女性ホルモンの減少、家事・育児・介護などと仕事の両立による過労などが関係していると考えられます。若年層では、爪先のとがった靴の着用なども関係しているといわれています。

女性ホルモンと上手につきあう

また、倦怠感や頭痛、動悸などの症状があるものの原因が見つからない「不定愁訴^{ふていしゅうすい}」といわれる状況の女性も多く、自律神経失調症や更年期障害、甲状腺障害や心身症などが関係しているともいわれています。

女性の体内では、卵巣からエストロゲン（卵胞ホルモン）とプロゲステロン（黄体ホルモン）という2つのホルモンが分泌されており、これらの作用によって毎月の排卵や月経が起こっています。

ホルモンのバランスが乱れるとさまざまな身体の不調が起こります。原因としては、不規則な生活や無理なダイエット、過度の飲酒、喫煙などのほか、精神的なストレスも挙げられます。特に女性の社会進出による、仕事や家庭でのストレスの増大は深刻です。過労や家事と仕事の両立などの身体的負担に、育児や介護に関する悩みなど心理的負担が重なり、バランスを崩す場合も多いといえます。



女性の健康づくりを応援

気軽に健康相談 るかなび 聖路加健康ナビスポット

築地駅に程近い「るかなび」は、聖路加看護大学が開設する、健康情報サービスの拠点です。血圧や骨密度の測定、看護師や管理栄養士による健康相談などのサービスが無料で利用できます。「市民の皆さんが自分の健康を自分でつくることをお手伝いする施設です」と、コーディネーターの石川道子さん(写真右)は話します。

ここでは食生活の見直しや運動不足の解消についての助言、病気に関する情報なども得られます。「中高年の女性では、寝込むほどではないけれど、体調が思わしくないという声が多いですね。ちょっとした健康不安の話から、精神的な悩みとのかかわりが判明する例もあります」とは、保健師でもある山岡栄里さん(写真左)。些細な疑問や相談にも丁寧に対応しています。

るかなび

約1350冊の闘病記や医療情報書が並ぶ書架のほか、ハーブティーサービスやランチタイムミニ健康講座などが実施されるロビースペースも備えた充実の空間。

TEL 03 6226 6390

URL <http://www.kango-net.jp/project/15/index.html>



また、成長期と成熟期、老年期と、年齢によってもホルモンバランスは変化し、健康上の問題も異なっています。成長期では月経のリズムが安定しないことによる月経困難症など、成熟期から老年期にかけては閉経前後の女性ホルモンの減少による更年期障害や骨粗しょう症などが考えられます。その時々での体調変化を理解し、上手に付き合うことが重要です。

女性のための医療

そんな女性の身体の特性に配慮した医療が「性差医療」です。女性特有の疾患に関しては、「何科にかかればいいのかわからない」「恥ずかしい」「男性医師には話にくい」などと、受診をためらう間に症状を悪化させる例が多いのが現状です。

このような問題に配慮した医療を行うのが、女性の医師やスタッフが診療を担う女性専用の医療機関「女性外来」です。婦人科はもちろん、複数の診療科目を兼ね備えたところが多く、健康上の不安や、ちょっとした不調を気軽に相談するのに適しています。従来の病巣に働きかけることを中心とした医療にとどまらず、生活環境や心理状態も考慮して女性をサポートする「かかりつけ医」的な存在として、注目されています。

また、女性特有のがんについては、自治体や健康保険組合などが検診を実施しています。乳がんなどは早期に発見できれば治る確率も高いため、早めの発見・診断・治療を訴える「ピンクリボン運動」などを通じ、セルフチェックや検査の重要性が呼びかけられています。定期的な検診はもちろん、自分の心身の状態や生活状況を振り返り、不安があれば放置せず、医師や保健師、医療機関などの相談窓口を訪れることが大事です。

女性の健康づくりを応援

乳がん手術後の女性をサポート YWCAフィットネスワオ

近年、増加傾向にある乳がん。手術の後、しびれや運動障害、腕が上がりにくくなるなどの症状が残ることがあります。

そんなとき、術後のケアを助けてくれるのが、御茶ノ水駅に程近い「YWCAフィットネスワオ」です。ここは女性専用のフィットネスクラブで、1905年の創設時から女性の健康教育に取り組んできました。2年前から、乳がん手術を受けた女性の心身の回復を図るプログラム「encore(アンコア)」を始め、術後8週間を経た女性を対象に、医師や栄養士による生活指導、リンパマッサージやリラクゼーションの方法、プールを使った運動の指導などを行っています。

参加者は年齢や術後の経過年数もさまざまですが、全員が乳がん経験者であるため、悩みなどを共有し、互いに励ましあって回復を目指しています。

YWCAフィットネスワオ

女性の健康増進に役立つ講座が充実。「encore」は8回の講座で構成されるプログラムを年4回開催。
TEL 03 3219 2565

URL <http://www.tokyo.ywca.or.jp/wow/>



自分を知り、健康に

健康には十分気をつけていても、病気になるってしまったらどうしたらよいのでしょうか。身体の治療はもちろん重要ですが、精神面でのケアも必要です。不安なときにはひとりでも悩まず、誰かに相談したり話を聞いてもらうことも有効です。

そんなとき、頼りになるのが自助グループです。婦人科系のがんなどが情報を交換したり、集まって思いのたけを語り合ったり、講座を開く

などの活動をしています。リハビリプログラムなどを修了した人たちによる、気持ちをわかちあう集まりなども各地で開かれています。

最近では、患者自身が自分の身体の状態について情報を入手し、病気の治療法や生活の仕方を選択することができるよう環境が整ってきました。病気に関する情報だけでなく、心身が不調に陥る前に生活を改善し、危険要素を取り除くための助言が得られる資料も豊富に揃っています。しかし、その中で情報を取捨選択し、何を信頼するかは各自の判断に委ねら

れており、選択肢が少なかった時代に比べると、現在のほうが迷いや悩みが多いかもしれません。

そんな時代だからこそ、自分の心身の状態を知ることが重要です。身体に表れる症状は、その部分が必要であることの警告といえます。この機会を、自分の日常を振り返り、無理がないか点検するチャンスととらえ、自分に合った生活の仕方を考え、より健康でたのしい生活を目指したいものです。

監修 青木正美(青木クリニック院長)

女性の健康づくりを応援

体調不良は自分と向き合うチャンス 竹森茂子さん

働く女性に多く見られる問題ですが、職場や通勤電車など冷暖房を過剰使用する環境におかれていると、体温調節や血液循環の機能が弱り、冷えや便秘などになりがちです。これらの体調不良は身体に無理が生じていること、休息を要することの合図なのですが、気づかずに我慢したり、放置しておくことで深刻な疾病につながります。そうならないためには、自分と向き合い、心身をリラックスさせる技術を身につけることが必要です。身体計測や健診も大切ですが、数値に一喜一憂するのではなく、この脂肪率だと好調、この血圧値では不調というように「自分にとっての健康」を知るひとつの目安として利用してください。

丈夫な身体づくりには運動も必要ですが「健康のため」と気負わず、楽しく取り組めるものを無理なく気長に継続することが大事です。運動が困難であれば、一日のうちの数分でも、意識的に休息の時間をもちましょう。例えば昼休みの散歩や植物の世話、足湯に浸かることなどでもいいのです。自分をいたわる方法を身につけこまめに実践すれば、身体の変化にも気づきやすくなります。不調を自分と向き合う機会ととらえ、生活を見直してみましょ。



たけもり・しげこ

健康運動実践指導者。各地でヨガを中心とした「からだの自立教室」、コミュニケーションのための演劇ワークショップ等主宰。中央区ブーケ祭りのからだほくし講座も好評。

中央区が実施する検診のご案内

区では、がんの早期発見・治療を目的として、区民の女性を対象に検診を実施しています。詳細は「問合せ・申込先」へおたずねください。

乳がん検診

内容 問診・視触診・マンモグラフィ

対象者 40歳以上で平成18年度に区の乳がん検診を受診していない方(2年に1回受診可)

妊娠中の方等、受診できない場合があります

子宮がん検診

内容 問診・視診・内診・細胞診
対象者 20歳以上で偶数歳の方(2年に1回受診可)

平成19年度は19年4月1日から20年3月31日の間に偶数歳に達する方が対象

両検診共通事項

実施場所 区内実施医療機関

費用 無料(精密検査は受診者負担)

申込および検診期間 平成20年

3月10日まで

申込方法 左記「問合せ・申込先」

へ電話で申込み

【問合せ・申込先】

福祉保健部管理課保健係

TEL 03 3546 5397

女性の健康と痛みの関係

青木クリニック院長

青木正美



3Hの欠如が招く「隠れうつ」

私の診療所は、「ペインクリニック」といって、痛みの緩和を主な診療内容としています。最近、診療所を訪れる女性には、年齢を問わず肩こりや頭痛を訴える人が目立ちます。気になるのは、そこに見え隠れするうつ病です。

うつ病は近年、日本でもようやくその存在が社会に認知されてきました。患者の増加に加え、日本の経済活動などを担ってきた働き盛りの男性が自殺する例が目立つようになり、社会に危機感が生まれたのでしょうか。しかし、実際にはそれ以前から、多くの女性が潜在患者であったことが予想されます。

うつ病を含む気分障害の患者に占める女性の割合は高く、平成17年では全体の6割を超え、男性の約1.7倍となつていきます(厚生労働省「患者調査」)。これには女性ホルモンが関係しているともいわれますが、日常生活の中にもうつ病を誘引する要素があると思われまふ。例えば安定した仕事に就けないとか、仕事を得られてもセクシュアルハラスメントに遭つとか、結婚すれば子育てや介護を二手に担わされるなど、男女平

等ではない現在の世の中で、女性は人生において疲労感の溜まる状況に陥りがちです。女性が大半を担ってきた家事仕事は、変化の乏しい作業の繰り返しで達成感に欠け、評価もされにくい側面があります。このような状況の女性は3H、すなわちHelp、Hope、Empressが欠如しやすいといえます。適切な支援がないために疲労が蓄積し、希望や活力を失い、幸福感が薄れ、うつ状態へ傾いていく危険性があります。

このストレスが、ごくありふれた頭痛や肩こりのような症状として表れることがあります。うつ病には、死を望むなどの深刻な症状もありますが、日常の些細な作業がこなせなくなるものもあり、身体の痛みを訴える女性にはこのような人がよく見受けられます。

自律神経のバランスにも注意

中高年の女性では、腰や膝など関節の痛みの相談が多くあります。男性に比べ骨や筋肉が弱いつえ、閉経による女性ホルモンの減少で骨がもろくなるのです。

若い女性では首の痛みや肩こりを訴える人が目立ちます。頭痛や不眠、便秘、冷え性などを伴うなら、自律神経失調も考えられます。自律神経には交感神経と副交感神経があり、これらの均衡が保たれていると昼は交感神経、夜は副交感神経が活発に働き、満足な食事や自然な就寝ができます。しかし、このバランスが崩れると、十分な栄養吸収や睡眠ができなくなり、体に変調をきたしてしまいます。

女性は月経周期や成長過程、妊娠、出産などによる女性ホルモンの増減があり、自律神経の調節が難しい面もあります。自分の体質やリズムを意識し、無理のない生活を送ることが重要です。

気の合う医師に相談を

診療科目の性質上、辛い痛みを抱えた人と向き合う場面が多いのですが、最近では「不定愁訴」と思われる女性が多く訪れます。痛みのほかに手足の冷えやしびれ、倦怠感などが見られますが、症状は人によりさまざまです。共通しているのは本人が苦痛を感じているのに、明確な原因が見当たらないことです。それでも当事者には痛みがあるわけですから、私はそれを和らげる処置をし、同時にその痛みが起る背景を探ります。

私は、多くの人が診療所や医師をも

つと気軽に利用すべきだと考えています。近頃はITの発達により、同じ悩みを抱える人と情報交換がしやすくなり、不定愁訴についても、気のせいではなく医療機関に相談してよいものなのだといふ認識が広がっていると思います。それ自体はよい傾向ですが、ネット上や雑誌で見かける「名医」が自分に合うとは限りません。相性がよく、親身になつてくれる医師が他にいれば、専門外でもとりあえず相談し、その人から専門の医師を紹介してもらつうほうがずっとよいと思います。

私は痛みに対する働きかけを専門にしていますが、痛みの背後に何があるかその人の生活状況や心理状態も考慮に入れなければ根治はできません。自覚症状がなくても計測による客観的評価が可能な病気もありますが、痛みは主観的要素が大きく、他人と比較できず、原因すらわからないものも数多くあります。そのあたりをきちんと理解できる医師を見つけ、健康で楽しい毎日を送っていたきたいと思えます。

プロフィール あおきまさみ

1958年生まれ。獨協医科大学卒業後、同大病院第一麻酔科入局。国立栃木病院等を経て現クリニック開業。腰痛、肩こり、頭痛、関節痛等痛みの治療を専門に手がける。

.....

雑誌の編集を通じて、皆が自分を肯定できる社会をつくりたい。

有限会社フェミックス 代表取締役 稲邑恭子 さん



Q 編集の仕事をするようになったきっかけは何でしたか。

社会科の教師に憧れて史学を専攻しましたが、大学卒業後は一般企業に就職しました。キャリア志向もなかったため、1年半で結婚し退職。3人の子どもを育てながら、夫の海外勤務についていた4年を含め、10年間は主婦をしていました。しかし、とにかく外に出て働きたくて、35歳のとき学童保育の指導員になりました。その後いろいろなアルバイトを経験する中で、現在かかわっている雑誌の前身「新しい家庭科 we」の編集に誘われ、この道に入ったのです。当時、家庭科の男女共修を呼びかけていたこの雑誌を、友人の勧めで購読していた縁もありました。子どもの頃は小説ばかり読んでいて、文章を書くのも好きだったので、編集の仕事はおもしろかったですね。

Q 現在の会社を設立するまでの道のりをきかせてください。

昭和57年に創刊し、10年近く携わってきた「新しい家庭科 we」でしたが、財政難のため平成4年に廃刊が決まりました。その際、長

年の読者からのあたたかい励ましもあり、「くらしと教育をつなぐ we」(以下we)という新たな名前で、読者会を発行母体に、その雑誌を引き継ぐことになりました。カンパを募り、活版印刷をワープロ打ちの完全版下入稿に変えて印刷費を抑え、資金難を乗り切りました。その後、読者から1口5万円で出資金を募り、平成7年に編集とカウンセリングの会社を設立。編集事業では、weの出版のほか、女性問題や青少年に関する分野の調査報告書なども手がけています。

Q 相談事業も行っているんですね。

最初は編集の仕事が週3日でしたから、残りの時間で女性の支援を目的とした相談を勉強し、友人たちと女性の生き方を考えるカウンセリングルームを立ち上げました。今は3つの大学でセクシュアルハラスメントなどの相談に応じるほか、都内の子ども家庭支援センターでDVや離婚、児童虐待などに関するカウンセリングにかかわっています。女性問題に強い関心を持っていただけではないのですが、この仕事を通じて男性中心の社会構造やその問題性を感じるようになりました。

Q 「we」はどのような雑誌を目指しているのでしょうか。

若い頃は正論を言い続ければ社会が変わるような幻想を持っていましたが、世の中はそう単純ではありません。今のようない閉塞感に満ちた時代であれば、まず困難な中でも、笑いや希望を失わないことが大事なかなと思っています。この雑誌に登場する人の生き方やメッ

ページに触れて元気になり、読後に立ち上がる気力が湧くような、そんな媒体でありたいと考えています。

Q 編集の仕事のおもしろさは何ですか。

取材を通してさまざまな人に出会い、多種多様な情報を得られることが楽しいですね。私自身、取材をしたことが縁でもう10年ほど気功講座に通っており、心身の健康維持に役立っているほか、物事の伝え方にも影響を受けています。また取材内容を誌面に反映させ、多くの人に届けることで、情報と人とを仲介できるというのもこの仕事の醍醐味です。花粉を運ぶ蜜蜂のようなものではないか。締め切り前などせわしない場面もありますが、刺激に満ちた仕事です。

Q これからやってみたいことはどんなことですか。

居心地のよい、開かれた場作りでしょうか。閉塞的な団体や組織、空間は人の活力を失わせます。異質なものの出入りや交流があつて風通しがよく、「多様性」と「隙間」、適度ないい加減さが確保されていることが重要なのです。雑誌づくりでも、年に2度開催するweフォーラムでもこの観点は大事にしています。

昔、アルバイトで福祉系宿泊施設の仲居をしていた頃、仕事のできない私に「あなたと働いていると落ち着く」と言ってくれた先輩がいました。人には多様な面があり、相手や関係性によってプラスにもマイナスにも働くものです。皆が何らかの形で受け入れられ、自分を肯定でき、明るく生きていけるような社会をつくることに、私の仕事が役立てばと思っています。

10月20日(土)・27日(土)中央区男女共同参画講座

「感謝の気持ちをかたちにのこす～ゆいこんで～」を開催しました。

ブーケ21事業協力スタッフの企画・運営で、男性対象の講座『感謝の気持ちをかたちにのこす～ゆいこんで～』を開催しました。

講師には、ファイナンシャルプランナーとして活躍中の小松久雄さんを迎え、主に3つの実践的なテーマに即して話を聞きました。



講師の小松久雄さん

1つ目は、自分の人生を振り返り、今後の生き方を考えてみよう」という話です。ここでは、何を生き甲斐として第二の人生を送るのかを考え、退職前後にしておきたい準備等についてのアドバイスを聞きました。2つ目のテーマは、正しい遺言の知識を身につけ、まちがいのない遺言書を作ろう」です。ここでは相続・遺言の基礎知識として法定相続人の範囲と順位、相続割合等について、また遺言書の種類等を学びました。最後に「のこされる家族への感謝の気持ちを、遺言を通じて表現してみよう」という話の中では、せつかく作った遺言書を無駄にしないために、遺言書の正しい書き方を事例をもとに

して学びました。

第2回の当日は、あいにく台風が東京に接近している最中ということで悪天候に見舞われましたが、その中で交通の便を考えて早目に来た方もあり、この講座を楽しみにしていた参加者が多かったことが感じられました。

講座の中では、現実問題として遺言を書く必要に迫られている方などが、具体的な細かい点などを質問したり、終了後に個人的に助言を求めたりする場面も見られました。このような参加者の姿に、「遺言」というものや人生の過ごし方に対する人々の関心の高さ、またそれらに関する情報提供のニーズを感じました。そういった意味でも、今回の講座は十分に意義あるものだったと言えます。生活に即した観点からの講座をこれからも企画していきたいと、スタッフ一同次年度への思いをうなげることができました。



講座風景

(ブーケ21事業協力スタッフ執筆)

広がる男女共同参画/企業レポート

有限会社ライトデザイン(銀座)

光を通してライフスタイルの提案

銀座の古風な建物に事務所を構えるライトデザイン。建造物の照明をデザインする会社です。これまで、まつもと市民芸術館や保原町庁舎に代表される数多くの施設や住宅等の照明を手がけ、区内でもMikimoto Ginzaやマロニエアートなど広く知られた建物にかかわっています。

7名の社員はいずれも照明デザイナーで、美術や建築を学んだ30歳前後の若手が多く、5名が女性です。照明デザインは柔軟な感性や想像力が不可欠というところで、女性が多く活躍しているようです。

その一人である横田



横田道子さんと代表の東海林弘靖さん

道子さんは、代表の東海林弘靖さんとともに会社を設立したメンバーで、現在5歳の子どもを育てながら働いています。妊娠中は出産の3日前まで出勤し、3カ月の育児休暇取得後、通常勤務に戻りました。現在も仕事の性質上、夜間の業務や出張が多いようですが、個別の事情に配慮する社風のもと、夫との分担や親の協力により、仕事と育児を両立しています。「照明デザインの仕事は美味しい光の

料理をつくることであり、デザイナーはいわばシェフの役割」と東海林さんは語ります。光をあてる対象に合わせた素材を選び、特性がいきるよう演出する作業は、料理に似ているかもしれませんが、最近では設計の段階からかわり、建築の仕上げの材料や色を提案することもあつてます。

日本の住宅では蛍光灯が多用されていますが、これは他国ではあまり見られない光景だそうです。

さまざまな地域の明かりを見てきた東海林さんは、ほの暗いリビングで家族の写真だけをスポットライトで照らすといった欧米の例に触れ、照明は単にその場を明るくするだけでなく、空間の個性や役割、居合わせ人の気分などに合わせたものを使用することで、暮らしを豊かにできるものだと話します。

全ての部屋を画的に照らすのではなく、体を休める場所、家族と語りつコーナー、読書する部屋といった、目的を意識した空間づくりをすれば、自分の時間を過ごす楽しみが増えるかもしれません。ライトデザインの仕事は、照明の演出を通じた、生活全体に対する価値観の提案ともいえるものではないでしょうか。

NEWS
『東京ウイメンズプラザ
フォーラム』に行ってきました

催事参加報告

10月12日(金)、13日(土)の2日間、東京ウイメンズプラザフォーラムが開催されました。男女平等参画推進に取り組むグループの活動発表や都内自治体の施策紹介等が行われる年に一度の催しです。

中央区の女性センターでは、平成19年実施の事業に関するパネル展示を行い、3月の『中央区女性史』発行や「講演と映画のつどい」、ブーケ祭りの開催などを紹介しました。



中央区の展示

たくさんの企画の中で目をひいたのは「人身売買〜彼女たちの現実」と題したポスター展です。夜の繁華街に立つ女性たちを写した数枚の写真から、不当な契約を通じて援助交際や性風俗の仕事に強要する犯罪行為の実情と、巻き込まれる人々の姿が伝わってきます。会場で渡される資料には、人身売買をなくすために私たち一人ひとりにもできることが書かれていました。人身売買が今まさにこの日本で起こっている現実を

直視し、自分ができることを地道に実行していく意義を、実感させられた展示でした。



ポスター展会場

(ブーケ21事業協力スタッフ取材・執筆)

中央区女性ネットワーク主催講演会「今を生きる樋口一葉 なぜ？お札の肖像に…」

明治初期、女性が勉学や生き方に制約を受けていた時代に、樋口一葉はその運命を受け入れつつも、力強く24年の生涯を生きました。一葉が、平成の今、紙幣の肖像に起用されることの意味とは…一葉を愛する研究者と考えます。

講演会終了後、講師の案内で「台東区立一葉記念館」を見学します。ぜひご参加ください。希望者のみ

日時 平成20年2月16日(土)

午後1時30分〜3時

会場 女性センター「ブーケ21」

講師 原田依子

(台東区立一葉記念館職員、樋口一葉研究者)

費用 無料

(講演会のみ。見学会参加者は交通費及び入館料等実費負担)

定員 60名 申込み不要(先着順)

問合せ先 中央区女性ネットワーク

TEL 03 3555 8088

この講演会は、中央区男女共同参画事業団体支援助成対象事業です。

配偶者暴力防止法の改正について

配偶者暴力防止法が平成20年1月11日から変わります。

保護命令制度の拡充、市町村に対する基本計画策定の努力義務等を定めた、配偶者暴力防止法の一部改正法が、平成19年の通常国会で成立し、7月11日に公布されました。

改正の主な内容

- 1 生命又は身体に対する脅迫を受けた被害者に係る保護命令
- 2 電話等を禁止する保護命令
- 3 被害者の親族等への接近禁止命令

市町村基本計画の策定の努力義務
配偶者暴力相談支援センターに関する改正
裁判所から配偶者暴力相談支援センターへの保護命令発令の通知

詳しくは、中央区総務部総務課女性施策推進係 (TEL 03 5543 0651)まで。

内閣府では配偶者からの暴力被害者支援情報サイト(<http://www.gender.go.jp/e-vaw/index.htm>)を開設しています。

館長雑記

国際女性建築家会議に参加しました

松川 淳子

10月初旬、ルーマニアで開かれた第15回国際女性建築家会議に参加しました。1963年にフランスで組織された建築、都市、環境の創造や研究に携わる女性の国際組織で、3年に一度、各都市で大会を持ち、研鑽や交流を続けてきました。

創設者で会長のド・ラトゥールさんはルーマニア生まれのフランス人。学校を出て、パリ市役所の都市計画部門で働こうとした頃、関係分野の知識以外に、軍隊経験と「男性であること」が求められ、やむなく自分のアトリエを設けて仕事を始めたそうです。

彼女は今でも、「女性であるだけで教育を受けられない国があることは、他人事ではない」、「一人では微力でも、手を携えれば打開できることもある」と皆を励まし、よりよい建築や都市を築く活動を続けています。アフリカやアジア、南米など世界中から集まった女性たちも、今回の開催テーマでもある「アイデンティティ」を生かしながら、日々の仕事や生活を通じて、女性にも男性にも住みよい社会を創りたいとの思いを新たにしました。

お勧め図書のご案内

女性センターでは、性別にとらわれないう、自分らしい生き方を応援する資料が揃っています。ぜひご利用ください。

『Dr.半熟卵のつばやき 産婦人科医の日記』 須藤なほみ著



楽天の人気プログラム「医学」部門で連続第1位を獲得した「Dr.半熟卵のつばやき」の書籍化。現役の産婦人科医である著者が、女性特有の病気、月経や避妊について、わかりやすく、楽しく解説します。

『ベルセボリス』



マルジャン・サトラビ著
愛らしいイラストとユーモアに満ちた、イラン人の著者による自伝。革命や戦争に見舞われた成長期にも強い好奇心で日常を観察する様子や、イランでの女性の状況が綴られており、今冬映画化もされています。